

科目名	家族看護実践学 Family Nursing Seminar in Practice for Certificate Nursing Specialist
授業形態	講義(20%)、演習(80%)
標準履修年次	1年次
実施学期・曜時限等	秋学期A・B 木曜34限 (他曜日への振り替えあり。各回、受講生と協議の上変更の可能性あり)
実施場所	共同利用棟B205
単位数	2単位
担当教員名	涌水 理恵 Wakimizu Rie 安梅 勅江 Anme Tokie 小澤 典子 Ozawa Noriko 非常勤講師, 入江 佳子 Irie Yoshiko, 岩田 直子 Iwata Naoko, 児玉 久仁子 Kodama Kuniko
ティーチングフェロー(TF)・ ティーチングアシスタント(TA)	
オフィスアワー等	オフィスアワーは特に定めませんが事前にメール連絡をしてアポイントメントをとること 涌水 理恵 riwaki@md.tsukuba.ac.jp 安梅 勅江 anmet@md.tsukuba.ac.jp 小澤 典子 nozawa@md.tsukuba.ac.jp
授業の到達目標 (学習成果)	(1)家族を対象とした看護過程の展開が理解できる。 (2)家族へおこなった看護介入について、評価の方法が分かる。 (3)カルガリー式家族アセスメントおよび介入モデルを理解し使用できる。 (4)複雑な健康障害を有する患者とその家族日垂して、ケアとキュアを融合させたアセスメントを行うことができる。 (5)アセスメントやエビデンス、モデルに基づき、問題をあ帰結するための具体的な援助計画を立案することが出来る (6)立案した援助計画を家族看護学基盤十種で実践しながら、科学的に介入し評価することが出来る (7)家族員の状況に合わせて、立案した援助計画を修正することが出来る
他の授業科目との関連	家族看護学演習、家族看護学展開実習
履修条件	なし
授業概要	家族を対象とした看護過程の展開や、家族教育、家族へのサポート、ケースマネジャー、家族カウンセリング、家族療法等の介入方法に関する理論や技法を踏まえた看護介入について、理論を復習しつつ事例をおさえる。また後半では、家族看護学基盤実習と並行して、健康障害を有する家族員の治療の過程を踏まえたうえで、家族に援助計画(看護介入)を立案し、専門看護師の役割・機能に照らし合わせながら科学的に介入を評価する。
キーワード	家族のアセスメント、家族療法、家族看護介入
授業計画	1(10/3 5限)家族を対象とした看護介入理論および介入モデル(児玉・涌水) 2(10/3 6限)家族を対象とした看護過程の展開(実践事例の紹介)(児玉・涌水) 3(9/3 4限)(がん患者と家族を対象とした看護過程の展開(実践事例の紹介))(入江・小澤) 4(9/3 5限)(がん患者と家族を対象とした看護過程の展開(ディスカッション))(入江・小澤) 5(10/17 5限)(外来通院患者と家族を対象とした看護過程の展開(実践事例の紹介))(岩田・涌水) 6(10/17 6限)(外来通院患者と家族を対象とした看護過程の展開(ディスカッション))(岩田・涌水) 7(10/24)(小児患者と家族を対象とした看護過程の展開(実践事例の紹介))(岩崎・涌水) 8(10/24)(小児患者と家族を対象とした看護過程の展開(ディスカッション))(岩崎・涌水) 9(10/31)(カルガリー式家族アセスメント/介入モデル)(涌水・小澤) 10(10/31)(カルガリー式家族アセスメント/介入モデルに関するディスカッション)(涌水・小澤) 11(11/7)(家族看護エンパワーメントガイドライン1)(安梅) 12(11/7)(家族看護エンパワーメントガイドライン2)(安梅) 13~20(未定)(家族看護学基盤実習と並行し、受け持ち患者とその家族のアセスメント、援助計画の立案・評価・修正)(涌水・小澤)
学修時間の割り当て及び授業外における学修方法	講義(6時間)、演習(24時間) 授業外でも、授業内容について積極的に思考する態度をもつこと。また教員や学生同士で授業内容の活用方法の討論をおこなうことで、臨床(研究)現場における応用力を向上させること。
成績評価方法	15コマ以上の出席と最終評価が60点以上が単位主要要件である。 成績評価方法および評価配分は以下の通り。毎回、プレゼンテーション(50%)、ディスカッション(50%)で、到達目標の達成度を以下の基準に基づいて判定し、全20回分の平均をとって成績を評価する。 評価基準は以下の通り。 到達目標の1~5を指導に従って大旨達成できればC以上と判断する。 到達目標の1~7を指導に従って大旨達成できていると判断されればB以上と判定する。 到達目標の1~7について優れて達成されていると判断されればAと判定する。 到達目標の1~7について非常に優れて達成されていると判断されればA+と判定する。
教材・参考文献・配布資料等	吉川悟:システムズアプローチのものの見方。ミネルヴァ書房。1993.P22-56 石原邦雄:家族と生活ストレス。放送大学教育振興会。2000。P77-107 野末武義:家族ライフサイクルを活かす-臨床問題を家族システムの発達課題と危機から捉え直す。精神療法。2009.Vol35(1).P26-33 モニカ・マックゴードリック:ジェノグラムのはなし。東京図書株式会社。1988.P2-13,187-199

その他(受講生にのぞむことや 受講上の注意点等)	やむを得ず欠席する場合には事前に必ず申し出ること。やむを得ず欠席する場合には事前に必ず申し出ること。30分を過ぎた遅刻は欠席とみなす。
-----------------------------	---